

## 『紫式部日記』の出産・産養いに 見られる医療思想

長瀬 治

『紫式部日記』は、紫式部の仕えた一条天皇の中宮彰子  
が、出産のために里下りした寛弘五年（西暦一〇〇八年）  
秋七月から、同七年正月までの約一年半の記録である。し  
たがって貴族全盛時代の、宮廷貴族たちの生活や思想の実  
態を具体的に知ることができる点である。とりわけ、敦成  
（あつひら）親王―後の後一条天皇―の出産とそれに引き  
続く産養（うぶやしな）いの描写は、迫真力がある。

藤原道長にとって、娘彰子が一条天皇の御子を懐妊した  
のはたいへんな喜びであった。安産でしかもなおその御子  
が皇子ということになれば、摂関政治への宿願が叶えられ  
ることになるからだ。しかし出産は、当時にあつては死亡  
率のかなり高いものであったに違いない。この危険を無事  
突破しなければならぬ。そこで日記の冒頭は、秋色新た

な道長の土御門邸に、安産祈願のための不断経の声が朝の  
冷気の中に流れる描写から始められる。やがて五壇のみず  
法も開始され、僧正が二〇人の伴僧を率いて加持を行う。  
法住寺の座主やへんち寺の僧都も登場する。八月二十日過  
ぎになると上達部や殿上人も御殿に宿直して読経に美声を  
競いあつたと記されている。

そうした中での御産所は白一色、君達・殿上人も統々と  
詰めかける。中宮にとりついている（と信じていた）物の  
けをよりました童子に移す騒ぎがある。これには修験道の行  
者や陰陽師もすべて残りなく集められて、修験祈禱が行わ  
れる。そうしたもののしい中で、九月十一日、頭官高僧  
とくろ狭しと詰めかける中で、安産を祈って中宮は頭髪を  
剃り落として受戒し、散米白くまき散らされる。僧も俗も  
いちだんと読経の声を張りあげるので出産なさる。後産に  
はまたまた「物のけ」の「ねたみののしる声」が気味悪く  
聞こえ、僧や験者がそれを必死に鎮定するさまをも詳しく  
記している。これらを通じて、出産時にもっとも恐れたの  
は「物のけ」であり、それを抑えるために修験道の験者ら  
の強力な祈禱が行われる。出産時の最大の恐怖は「物の

怪」であったと理解される。

その後あらためて御湯殿の儀式があり、女房が大勢で奉仕する。宮中からは勅使が御剣を持参する。「御はその緒」を竹刀で切る役は道長が当たる。「御乳つけ」すなわちはじめに授乳させ申す役は橘の三位徳子。さらには乳母たち。あらためてまた「御湯殿」の儀が行われるが、奉仕の女房も白衣、御湯桶の台も、女房の元結いもすべて白色。この時の奉仕の人々の名だけでもたいへんな数である。

やがて新皇子は道長が抱き、御剣持ち、虎の頭（造り物。この影を産湯に映して魔を払い皇子の無病を祈る）持ち、産衣のあれこれを手分けして持つ人々。さらに散米の儀があり、「文読む博士」や「弦打ち」の役人二〇人、といったありさまで、その後は産湯が毎日朝晩二回行われる。そのありさまや、奉仕の人々の服装からしぐさまで詳細に描写されているのは、作者が女性であるからであろうか。

ついで「産養い」の儀が、三日、五日、七日、九日、と盛大に進められていって、帝の行幸が十月十六日にある。船遊びの奏楽などもあって、豪華にその様が描かれている。

十一月一日には「五十日（いか）の祝い」、そして皇居に還御なさるのは十七日である。

明けて寛弘六年には宮中で「御戴餅」の儀などが描かれ、寛弘七年の正月三日もまたこの儀が詳しく書かれていて、この儀式の重要さを感じさせられる。日記はさらにこの弟皇子の敦良親王―後の後朱雀天皇―の「御五十日」の儀をも詳述して終っている。

これらを通して考えられることは、近代医学の祖となるようなことはほとんど書きとめられず、絶えず強調されたのは、破魔、降魔の祈禱医学であったことである。

医学の究極の目標は生死の問題である。とりわけ皇子誕生には、その時代の医学の全知識が採用される。そこで、これ以前や同時代の出産の記録をも参酌して、その医療思想を検討したい。

（杏林大学）